

市民文化財研究員活動報告書 26

2022. 3

仙台市教育委員会

仙台市富沢遺跡保存館

は じ め に

地底の森ミュージアムが開館して25年が過ぎ、これまで99万人を超える方々のご来館を頂きました。これも皆様方のご厚情の賜物と感謝申し上げます。

当館では、学校教育活動との緊密な連携を図るとともに、市民の生涯学習を支援するため、各種体験教室・講座を開催しております。また、その一環として遺跡や考古学について深く学びたい、そうした意欲を持った方々の自主的な学習を支援するために、市民文化財研究員育成という特色ある事業を行ってまいりました。これまで、24期174名が市民文化財研究員の事業を修了し、多くの方々が当館のボランティアとして様々な活動を行っております。

今年度、第25期市民文化財研究員4名が、それぞれのテーマに沿った活動を行い、その活動成果を報告するために本書を作成しました。これからの研究員の活動に期待するとともに、今後とも皆様方のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

令和4年3月

仙台市教育委員会
教育長 福田 洋之

公益財団法人 仙台市市民文化事業団
仙台市富沢遺跡保存館
館長 武山 剛久

目 次

I 市民の自主的な生涯学習活動への支援

II 市民文化財研究員とその活動

III 活動支援概要

IV 活動報告

土偶に込められた想いとは……	猪狩 嗣元	8
ルヴァロワ技法での石器製作実験	岩山 のぶ子	12
仙台市の遺跡を訪問してみて	菅藤 俊昭	18
縄文時代のアクセサリー	鈴木 清美	28

例 言

1. 本書は令和3年度市民文化財研究員活動報告書である。
2. 本書の執筆は、IVの各活動報告を市民文化財研究員がそれぞれ行い、その他は仙台市富沢遺跡保存館である。全体の編集は館員鈴木英梨が行った。
3. 報告書作成に際して、主に参考とした文献や資料は各活動報告に参考文献として記載している。

I. 市民の自主的な生涯学習活動への支援

1. 基本構想における位置づけ

地底の森ミュージアムの建設は、1988年の富沢遺跡第30次調査における2万年前の森の跡と旧石器人のキャンプ跡の発見を契機としている。それは、この調査成果の重要性から、仙台市が調査対象地区の保存を決定し、その活用を図るために、翌年、基本構想策定委員会を設け、策定された構想において「考古系総合博物館」の建設がうたわれたことに始まる。この構想では、博物館の様々な活動の中で、生涯学習活動の基本方針の一つとして、「市民が、文化財に関するさまざまな情報にふれ、興味や関心に応じて自らのテーマを追求できるようにする」とし、「市民の考古学教室」などを通して、自主的な活動を支援する方法が考えられていた。これは、文化財、特に埋蔵文化財について、その大切さを知ってもらうために、それまで行われてきた発掘調査の現地説明会や考古学に関するさまざまな講座、講演会、展示会などとともに、より積極的な方法を推進していくことを示したものであった。

2. 生涯学習活動と市民文化財研究員

地底の森ミュージアムでは、生涯学習活動として、来館者に自由に参加してもらうたのしい地底の森教室、石器を使ってみようコーナー、参加者を公募する親子でつくろう！古代米、考古学講座、富沢ゼミなどを行っている。こうした活動の参加者には、もっと遺跡や考古学を知りたいと思う市民や新たに興味関心を持つ市民がおり、専門的な質問を受けることもある。また、一般の来館者についても、その関心は富沢遺跡だけではなく、地域や時代を越えていることを認識させられる。

こうしたこともあり、基本構想にもうたわれていた市民の自主的な活動の支援をどのように行っていくかが開館を前後するなかで検討された。施設面では館内に市民活動のための専用スペースはなく、また、研修室の利用や利用日の工夫、支援する市民の数など、制約は多かったが、平成8年度に第1期の「市民文化財研究員」15名を募集し始め、令和2年度まで24期にわたって合計174名の活動成果を『市民文化財研究員活動報告書1～25』として刊行してきた。平成20年度からは報告書をホームページで公開している。

令和3年度は、第25期市民文化財研究員として5名が参加し、うち4名がそれぞれのテーマに沿って自主的に活動を行った。令和3年度は、令和2年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、さまざまな制限下での活動となった。

Ⅱ．市民文化財研究員とその活動

1．目的

考古学や遺跡に興味をもっている市民が、地底の森ミュージアムを核として、その支援を受けながら、自主的にそれぞれのテーマを学び、歴史や文化をより身近なものにすることを目的としている。

2．活動期間

年度の1年間とする。定員は10名(今期は令和3年5月26日～令和4年3月23日)

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のための臨時休館等があり、4・5月は活動することができず、5月26日より感染症対策を行った上で活動を開始した。

3．支援の内容

(1) 研究場所の提供

- ・地底の森ミュージアム1階研修室の開放。

(2) 研究の補助および研究方法についての相談受付

- ・学芸員による考古学についての講義。
- ・学芸員による個人ごとの対応。

(3) 収蔵図書の利用

- ・室内での閲覧。必要箇所の複写については有料。

(4) 市民文化財研究員証の発行

- ・登録日あるいは相談があるときは、これを提示し入館。

4．活動内容

(1) 毎週水曜日午前2時間の学習(地底の森ミュージアム1階研修室)

登録日(館員1名が在室)

(2) 年1～2回開催する見学会での学習(遺跡や博物館施設の見学)

(3) 活動報告書の刊行

(4) その他

- ・館内では、市民文化財研究員証をネームプレートとして付ける。
- ・登録日が休館日にあたった場合は学習を休みとし、翌日に順延しない。
- ・研修室が使えない場合があるため、事前に予定表を配布して周知する。

Ⅲ. 活動支援概要

1. 概要

研究員はそれぞれのテーマで館内外で活動を行った。それについては活動報告に述べられている。ここでは館での支援活動の概要を総括する。

令和3年5月26日～8月11日	登録日学習の開催日	
8月11日～9月	自主学習期間	
10月～12月	登録日学習の開催日	活動報告執筆のための相談
令和4年1月～3月	登録日学習の開催日	活動報告執筆のための相談

2. 第25期市民文化財研究員修了者（五十音順）

猪狩嗣元 岩山のぶ子 菅藤俊昭 鈴木清美

3. 週1回の半日単位の学習

今年度は、週1回の登録日を水曜日の午前に設け、活動を行った。

4. 登録日と出席者数

令和3年	5月26日	オリエンテーション【5名】		
	6月2日	講義【5名】	6月9日	講義【5名】
	6月16日	講義【4名】	6月23日	講義【5名】
	6月30日	館外研修【5名】	7月7日	講義【5名】
	7月14日	講義【5名】	7月21日	講義【5名】
	8月4日	講義【5名】	8月11日	講義【3名】
	10月6日	講義【4名】	10月13日	館外研修【4名】
	10月20日	館外研修【5名】	10月27日	館外研修【5名】
	11月10日	館外研修【5名】	11月17日	講義【5名】
	12月1日	報告準備【5名】	12月8日	報告準備【4名】
	12月15日	報告準備【4名】	12月22日	報告準備【4名】
令和4年	1月12日	報告準備【4名】	1月19日	報告準備【2名】
	1月19日	報告準備【2名】	1月26日	報告準備【3名】
	2月2日	報告準備【2名】	2月9日	報告準備・提出【3名】
	2月16日	報告校正【2名】	3月2日	報告校正・提出【2名】
	3月9日	報告校正【4名】	3月16日	報告完成【4名】

5. 館外活動

6月30日は仙台市縄文の森広場の見学、10月13日は仙台市縄文の森広場で山田上ノ台遺跡の発掘調査体験の見学、10月20日は仙台市教育委員会文化財課の向田文化財整理収蔵室の見学、10月27日は名取市歴史民俗資料館の見学、11月10日は陸奥国分寺・尼寺跡ガイダンス施設の見学を行った。展示案内等にご協力いただいたみなさまにこの場を借りて御礼申し上げます。

IV. 活動報告

考古学あるいは遺跡をもとにして、研究員がそれぞれの興味関心をもとにテーマを設定し、調査を行った活動成果をまとめた。第25期市民文化財研究員は、令和3年2・3月の募集で、実際の活動は4月からの予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の臨時休館等があり、5月26日からの開始となった。申込は5名であったが、1名の方が年度途中で都合が悪くなって辞退し、4名が活動を継続した。

それぞれの活動をしてみると、活動当初から具体的なレポート作成に向けた動きをする方、当館での学習活動や他館を見学するなかで興味関心を持ったことを調べる方など、各自の関心をもとにして積極的な活動の傾向がみられた。それぞれが取り組んだテーマについては、遺跡や博物館の見学、関係施設への調査、文献やインターネットなどからの情報収集など、各自が様々な方法で行い、課題と向き合っていた。

こうした研究員の活動は、それぞれのペースを大切にしてい、今回は4名の活動を報告することにした。



6月16日 研修室での講義



10月27日 名取市歴史民俗資料館見学

土偶に込められた想いとは……

猪狩 嗣元

はじめに

縄文時代とは日本列島において採集・狩猟・漁労を主な生業とし、土器や弓矢を使い、さまざまな動植物を利用し、本格的な定住生活を始めた人々が残した文化が展開した時期で、約 15,000 年前から約 2,500 年前まで続いた。

縄文時代を象徴する遺物は、その時代の名前の由来となった縄文土器とヒト形をした土の焼き物の土偶である。

土偶が作られた意図については、母体から生まれ出る新たな生命の神秘に根差し、再生と多産や安産祈願の意味を読み取る説(再生・多産・安産祈願説)や、獲物の獲得を祈願する説(狩猟成功祈願説)、病気や怪我を治すために土偶を打ち砕き身代わりとする説(病気・怪我治療説)、土偶のほとんどが妊娠している女性像であることから豊穡の象徴であるとする説(妊娠女性説)、目に見えない精霊の姿を表現する説(地母神説)などさまざまな解釈がなされているが、未だその意味は解明されていない。

土偶はヒトの形はしているが、そのほとんどが抽象化されており、一見してこれらが「乳房や妊婦の体を模した装飾性などから、命を生み出す象徴としての女性の体、すなわち女神の化身である。」(渡辺 2013)と理解するのは難しい。縄文人には写実表現はできなかったのではないかとさえ思えるほどである。縄文時代の人々は、なぜ、どのような想いを込めて土偶を抽象化したのであろうか。

土偶をめぐる様々な説の中で、竹倉史人氏は「土偶は縄文人の姿をかたどっているのでも、妊娠女性でも地母神でもない。＜植物＞の姿をかたどっているのである。」(竹

倉 2021)と唱えた。食糧資源の多くを自然の植物に依存していたであろう縄文の人々にとっては植物霊祭祀こそが生存に直結する最重要儀礼であったと考える。すなわち土偶は、食糧資源となる植物の「植物霊」と円滑なコミュニケーションを願うための植物霊祭祀において用いられたと竹倉氏は結論づけている。

竹倉氏の、遺物として残りにくいために見逃されてきたであろう植物祭祀と土偶とを結びつけた、イコノロジーと考古学を組み合わせた視点は、形式学とはまた異なった視点からの発想であり、これまでの土偶の用途に関する論争に大きな一石を投じる解釈と思われる。

しかし、この説では私が最も期待していた山形県西ノ前遺跡から出土した国宝の「縄文の女神」の造形については全く触れられていなかった。高さ 45cm もある八頭身の独特な造形には一体どのような想いが込められているのだろうか。

土偶に込められた想いが狩猟・漁労の成功や植物性食糧の確保を祈願したものとする、土偶を作るのは狩猟や収穫の時期を控えた頃で、作られるのも年に数個ではないだろうか。また一年を通して食糧が豊富に手に入る場所とそうではない場所とでは作られる土偶の数も違ってくるのではないだろうか。

再生・多産・安産などを祈願したものというのであれば、その想いは縄文時代のすべての時期に渡り、すべての家族や集落単位の願いでもあるから多くの土偶が作られたのではないかと考えられる。

縄文人は現代の我々とは違い野生動物と同様な強靱な肉体を持っていたのではないだろう

うか。また医療技術がないとすれば重篤な病
気や怪我は直ちに死に繋がり、ほとんどの土
偶が壊れた状態で出土することから生まれた
「病気・怪我治療説」によるものならば、こ
の用途のために作られた土偶の数は少ないと
も考えられる。

また、出土する土偶数が増加する場合には、
土偶に込める想いや願い、生活環境の変化に
伴う不安や恐れなどが増加してきたからとも
考えられないだろうか。

そこで、出土した土偶の数は一体いくつあ
るのかを調べてみることにした。

1. 調査資料について

はじめに得た資料は、30 年前に作られ
た「国立歴史民俗博物館研究報告第 37 集
『土偶とその情報』」（国立歴史民俗博物館
1992）をもとにして作られた「土偶データ
ベース」（1995）で、昭和 62 年から平成 2
年度までに収集されたデータをもとにして遺
跡・時期別出土土偶数を示し、さらに「地方
自治体名、遺跡名、時期別土偶出土数、出土
土偶ごとの通称名、出土部位、出土遺構、サ
イズ、その他の属性、文献、実測図、写真デー
タ」までかなり詳細に記載されている。これ
によると全国の出土土偶数は 10,683 点で、
宮城県の土偶出土遺跡数は 10 ケ所、内 2 ケ
所は遺跡名不明で土偶出土数は 188 個と記
載されている。

次に得たのは、宮城県文化財課が宮城県の
ホームページに公表している令和 3 年 3 月
31 日現在の「宮城県遺跡地名表」と「宮城
県遺跡集計表」である。宮城県遺跡地名表に
は、各遺跡の「遺跡番号・遺跡名・よみがな・
市町村・所在地・立地・種別・時代・地目・
出土品」が記載されている。宮城県遺跡集計
表には、各市区（旧）町村ごとの「埋蔵文化
財包蔵地の数・埋蔵文化財包蔵地の種別ごと
の内訳・埋蔵文化財包蔵地の時代ごとの内訳」
が記載されている。

それによると、宮城県内の遺跡総数は
6,252 ケ所。そのうち縄文時代の遺跡総数は
全遺跡数の 40%にあたる 2,494 ケ所で、さ
らにその中で土偶が発掘されている遺跡は全
縄文時代の遺跡数の 4%にあたる 99 ケ所と
なっている。土偶が発掘された遺跡数はわか
ったが、それぞれの遺跡からどのような形
やサイズの土偶が何個発掘されたかのデータ
は 30 年前のものしか見つけることができな
かった。

そこで、宮城県遺跡地名表の縄文時代の遺
跡 2,494 ケ所の中から、出土品に土偶が記
載されている遺跡 99 ケ所の文化財調査報告
書に直接当たることにし、報告書から、出土
した土偶が製作された時代（層位）、個数、
各土偶の推定部位、サイズを調べてまとめる
こととした。

2. 土偶の数え方

土偶の個体数の数え方については『土偶と
その情報』（国立歴史民俗博物館 1992）に
ある以下の見解をそのままとした。「殆どの
出土土偶は破片の一部であり、一個体とみな
すにはまだ検討が必要な場合もあることは明
白である。また、顔面取手、土版等他遺物の
一部である可能性もある。しかし、破片の一
部であれ出現したことは事実である。本デー
タにおいては、現時点において明白に複数の
破片が接合し、一つの個体を形成しているも
のとデータ作成者に認識されるもの以外は
一つの個体として扱うこととした。」これを受
けて、完全な形で出土したものも、小さな破
片として出土したものも同じく 1 個体として
数えることとした。

しかし、この数え方にはいくつかの問題が
あると思われる。明らかに破片と見られる数
センチのものから高さ 45cm の国宝「縄文の
女神」までを一律に 1 個体の土偶としていい
のだろうか。

そこで、出土土偶を大型、中型、小型の 3

種類に分けて数えてみることにした。最大長が20cm以上のものを大型、10cm以上20cm未満のものは中型、10cm未満のものは小型の土偶として数えた。

さらに、頭部だけが出土している場合、頭部の最大長を4倍した長さで大型、中型、小型の土偶に分類した。また、胴部(胸部と腹部)だけが出土している場合には、胴部の最大長を2倍した長さで大型、中型、小型の土偶に分類した。これは、頭部や胴部だけの断片からその土偶の完形が想像できると考えたからである。「縄文の女神」の八頭身のプロポーションは特別な例外として、大部分の土偶は脚部が太く短く、ほぼ四頭身に見える。そこで体長は頭部の4倍と考えた。同様に、胴部は頭部のほぼ2倍のサイズとして、胴部の最大長の2倍を体長とした。

3. 宮城県の土偶出土状況

土偶が出土した全ての遺跡についてのデータを得ることはできなかった。そのわけの一つは、土偶が発見された時期にある。1950年の文化財保護法制定以前に発見された多くの遺物には、調査報告書はもとより発見に関する記録はほとんど残されていない。大崎市田尻の恵比須田遺跡で発見され、現在は国の重要文化財として東京国立博物館に所蔵されている縄文時代晩期のほぼ完形の遮光器土偶も、昭和18年に板垣安雄氏によって発見されたとの記録のみである(宮城県教育委員会1980)。

現在の文化財の発掘調査にあたっては文化財調査報告書として詳細な記録が残されている。調査の方法と経過から始まり、発見された遺構と遺物について層位や埋没状況、実測値、実測図、写真、考察などが実に詳細に記載されていて、発掘調査にあたられた調査員の方々の大変なご苦労と熱意が伝わってくる。発掘された土偶には、その全ての実測図と法量、部位名と、アスファルトによる接着

痕や朱など付着物の有無などが記載され、写真が添えられる場合もある。

なお、土偶が出土した縄文時代の遺跡数は宮城県遺跡地名表のデータでは99ヶ所となっているが、調べていく過程で、さらに16ヶ所あることがわかり、宮城県の縄文遺跡2,494ヶ所の中で土偶が出土した遺跡数は115ヶ所(4.6%)となった。追加した遺跡は以下のとおりである。

仙台市太白区：山田上ノ台遺跡

仙台市泉区：高柳遺跡

七ヶ宿町：小梁川遺跡、大梁川遺跡

蔵王町：二屋敷遺跡

柴田町：中居貝塚

大衡村：上深沢遺跡

旧田尻町：北小松遺跡、中沢目貝塚、

愛宕山遺跡

旧北上町：泉沢貝塚

旧岩出山町：向金沢遺跡、戦功壇遺跡、

丸山遺跡、根岸遺跡、

抑口B遺跡

4. 宮城県で出土した土偶の数

土偶が出土した宮城県の縄文時代の遺跡115ヶ所のうち、文化財調査報告書などでデータが得られた遺跡数は34ヶ所。詳細ではないが、各市町村の市町村史や文化財を紹介するパンフレットなどから一部のデータが得られた遺跡数は29ヶ所で合計63ヶ所(土偶出土遺跡全体の55%)であった。出土数や写真だけしか記載のない遺跡についてはサイズ分けはできないので、以下の表の出土土偶数の合計値は必ずしも合致はしていない。

宮城県内の全縄文遺跡の時期区分はできなかった。調査できた土偶出土遺跡の時期は以下ようになった。

前期	中期	後期	晩期	合計
5	20	15	15	55

調査できた遺跡から出土した土偶のサイズ

分けは以下ようになった。

時期	大型	中型	小型	合 計
前期	2	10	3	15
中期	33	46	199	278
後期	53	18	141	212
晩期	18	19	55	92
計	106	93	398	597

5. まとめ

調査報告書から得られた宮城県で出土した土偶は 597 個で、各市町村史や文化財を紹介するパンフレットから得られた個数だけのデータも含めると、1,140 個となった。土偶は前期から確認でき、出土数は中期に増加するが、晩期には減少している。土偶の大型化も時期と共に進んでいる。

縄文時代の人達にとっては自然のすべてが畏怖の対象であったとすれば、様々な願いを込めて多数の土偶が作られたのではないかと考えた。ところが、宮城県内の縄文時代の遺跡 2,494 ケ所の中で土偶が出土した遺跡は 115 ケ所（4.6%）に過ぎなかった。100 個以上の土偶が出土した祭祀遺跡と考えられている仙台市の大野田遺跡などもあるが、大部分の遺跡からは土偶は出土していないのである。なぜ土偶は作られなかったのだろうか。

小型とした 10cm 以下の土偶は大部分が破片であるが完形に近いものもあり、掌に収まるサイズのものは護符のようなもので、個人あるいは家族単位で作られ大切にされた物とも考えた。10cm 以上 20cm 未満の中型とした片手に乗るくらいの土偶は個人ではなく家か小さな集落単位に作られ置かれていたとも考えられる。20cm を超える大型のものは、長野県棚畑遺跡の広場の中央から出土した国宝の「縄文のビーナス」のように、何かの祭祀などの時に一つの集落を超えてより多くの人々の目に触れることを意識して作られたのではないだろうか。

大型土偶の増加は土製品の製作技術の向上の結果とも考えられるが、次第に人が増えて

きてムラが大型化し、それに伴う住環境や自然環境の変化、願いの複雑化や他の集落との交流の拡大なども要因にあると考えられる。

いったい土偶は何個作られたのだろうか。土偶を分類し、その形を基にして出土した破片から元の姿を復元し、サイズ分けをすることで、作られた土偶の数を知りたい。あわせて、認知考古学の研究で土偶の表情は時期が進むとともに陰しくなってくると言われるが、土偶の顔と大きさと個数から読み取れる想いの変化を知りたい。

そしてなぜ弥生時代に入り稲作が始まるとともに土偶はほとんど作られなくなったのだろうか。土偶にこめられた人々の想いもまた消えてしまったのだろうか。

縄文の人たちの想いを、暗い倉庫の整理箱で眠る土偶達にこれからも問い続けていきたい。

引用参考文献

国立歴史民俗博物館（1992）「国立歴史民俗博物館研究報告第 37 集『土偶とその情報』」
国立歴史民俗博物館

竹倉史人（2021）『土偶を読む』晶文社
土偶データベース（国立歴史民俗博物館）
<https://www.rekihaku.ac.jp/doc/gaiyou/doguu.html>（最終閲覧日 2022 年 2 月 9 日）
宮城県遺跡地名表・遺跡集計表
<https://www.pref.miyagi.jp/site/maizou/miyagiisekitimeihyou.html>（最終閲覧日 2022 年 2 月 9 日）

宮城県教育委員会（1980）『宮城県文化財調査報告書第 67 集 金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎一号墳他』宮城県教育委員会

渡辺 誠（2013）『よみがえる縄文の女神』学研

各遺跡の発掘調査報告書やパンフレット類の掲載は省略した。

ルヴァロワ技法による石器製作実験

岩山 のぶ子

はじめに

子供の頃、道端で見つけた石を拾っては集めていた。いろんな形の石、きれいな色の石、チョークのように書ける石、ところどころ光って見える不思議な石。この頃から石は面白い、魅力的だと思っていた。

今、地底の森ミュージアムのボランティアで石器班に在籍しているのも小さい頃の思い出とつながっているのかもしれない。石器班では、週一回石器づくりを行っている。これは、ホモ・サピエンス（現生人類）の石刃技法を主に行っており、石核から剥片を剥離し、その剥片を素材として多様な石器に加工（尖頭器やナイフ形石器など）するものである。これにはかなり高度で熟練の技術が必要である為、私は6年たってもさっぱり上達せず、いつも剥片取りに格闘している。

旧人であるネアンデルタール人のルヴァロワ技法も、そう簡単な技術ではない。ただ、石核を整形する時の剥片がいつもより力強く叩けて大きく取れるので、とても豪快で楽しそうに思えた。もちろん、最終剥片のルヴァロワ剥片の打点も力強く一撃するのである。

もしかしたら、私の技量でもうまく剥片が取れるかもしれない。そんな期待を持って、ルヴァロワ技法石器製作実験を行うことにした。

1. ルヴァロワ技法

ふだん石器班で行っている石器づくりの作業は、後期旧石器時代の石刃とよばれる縦長剥片を連続して、規則的に剥離する石刃技法である。今回実験するのは、中期旧石器時代のルヴァロワ技法である。実験に入る前に、ルヴァロワ技法について調べたことを各書籍

から抜粋してまとめた。

- ・ルヴァロワ技法は中期旧石器時代に流行した代表的な石器製作技法である（大沼2002）。

- ・中期旧石器時代を中心に、アフリカ、西アジア、ヨーロッパなどで用いられた剥片剥離技術の一種である（旧石器文化談話会編2000）。

- ・ネアンデルタール人が編み出した技法は、原石となる石を打ち欠いて慎重に調整し、そこから目的となる剥片を剥ぎ取って石器を製作するというもので、これを「ルヴァロワ技法」と呼ぶ。この技法では、三角形の槍先や多角形の加工具などを作ることができた（NHK スペシャル「人類誕生」製作班2018）。

- ・ルヴァロワ技法は硬質ハンマーを用いた直接打法による入念な剥離法である（大沼2002）。

- ・ルヴァロワ技法で作られた石器は、最初に発見された洞窟の名前にちなんで「ムスティエ型石器（ムスティエ文化）」と呼ばれた（NHK スペシャル「人類誕生」製作班2018）。

- ・ルヴァロワ技法に特徴的な石核はしばしば「亀甲形石核」と呼ばれる。ルヴァロワ型の目的剥片は、形態に応じて剥片、尖頭器、石刃に分けられるのが普通である。剥片と石刃は長さが幅2倍未満、2倍以上で区別し、尖頭器は末端が尖っていることで他から識別される。これらの生産物は2次加工せずに用いられる（旧石器文化談話会編2000）。

2. ルヴァロワ技法石器製作実験

実験の手順は、『文化としての石器づくり』

大沼 2002) に基づいて以下のように行った。

- ①石核の剥離作業面と側面を決定する。
- ②側面から剥離作業面（上方部分）が亀の甲羅のようにドーム型になるように整形する。中心に向けて稜線が入るように整える。
- ③石核側面の一部をルヴァロワ剥片を剥がすための最終打面として選び、そこに細かな剥離を入念に施して、打面の凸凹を取り除き、打面と剥離作業面との角度がほぼ 80 度になるように整形する。
- ④打面調整終了後、敲石（ハンマー）による強いかつ瞬発的な一撃で剥離作業面の大部分を除去（ルヴァロワ剥片の剥離）する。
- ⑤打撃の軌道が石核表面の上方をかすって抜けるように斜めに施す（打撃の角度と方向が重要）。

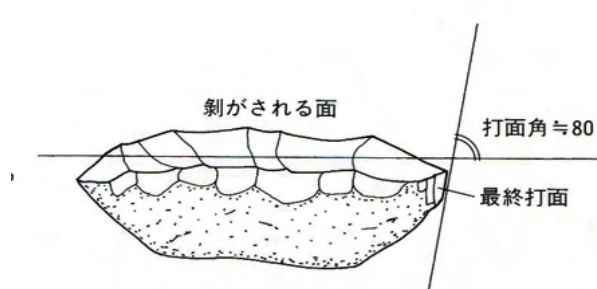


図1 ルヴァロワ剥離における打面角度
(大沼 2002 より引用)

使用した石材は、山形県最上川流域で採取した頁岩である。

実験結果は、表1のとおりである。

実験結果として記録に残っているのは5回だが、記録に残っていない実験も数回あった。ほとんどが失敗で、ルヴァロワ剥片を取るところまではたどり着けず、残骸の剥片だらけになってしまった。

5回の実験で、大きなルヴァロワ剥片が取れたのは、実験1・2・4の3回である。成功した共通点は、石核の打面調整がうまくいったこと、石核上方に亀の甲型の丸みが作れたことにある。剥がされる上方の面と側面の角度が80度を作ることができた最終打点への一撃についても、的確に正しい位置に敲石を当てることが出来たのが大きい。実験4では、石核が小さい割に大きな剥片が取れたのは、敲石の当てる角度と力のコントロールがうまくいったからである。

実験3と5では、小さなルヴァロワ剥片しか取れなかった。その原因の共通点は、最終打点への一撃に敲石の当てる位置がずれてしまい、目標の打点に敲石が当たらなかったことである。実験3は、ルヴァロワ剥片を剥がす面と側面の角度が80度にできず、40度の急角度になってしまったことで、打点の場

実験日	石核の重さ・大きさ	剥片の大きさ	所感	実験写真
＜実験1＞ 12月8日	955g 縦 13cm 横 12.5cm 厚み 8cm	198g 縦 10.2cm 横 8cm 厚み 2.8cm	結構立派な剥片が取れた。狙った打点にしっかりと当たった。	写真2
＜実験2＞ 12月15日	1091g 縦 13.3cm 横 11.1cm 厚み 6cm	145g 縦 10cm 横 8.5cm 厚み 1.5cm	縄文の森佐藤先生から打点の場所、一撃する力加減力を入れる角度等を教えていただいた。きれいな剥片が取れた。	写真3
＜実験3＞ 1月19日	290g 縦 7.6cm 横 8cm 厚み 4.7cm	17g 縦 9cm 横 4cm 厚み 4mm	石核が小さかったのと稜をうまく作れなかったので剥片がさらに小さくなってしまった。	写真4
＜実験4＞ 1月26日	471g 縦 9.5cm 横 9cm 厚み 5.4cm	106g 縦 9cm 横 7.8cm 厚み 1.7cm	形の良い剥片が取れた。石の面全体をほぼ剥がすことができた。	写真5
＜実験5＞ 2月16日	1402g 縦 16cm 横 12.5cm 厚み 7.5cm	154g 縦 9cm 横 7cm 厚み 1.5cm	石核が大きいわりに剥片が小さかった。打点の位置が悪く深くえぐれてしまった。	写真6

表1 実験結果表



写真1 石核に敲石（ハンマー）を当ててるようす



赤い丸で囲んだ部分
が剥片
（横からの撮影）



赤い丸で囲んだ部分
が剥片
（上からの撮影）



右側が石核
左側が剥片



赤い丸で囲んだ部分
が剥片
（横からの撮影）

写真3 実験2のルヴァロワ剥片と石核



右側が剥片
左側が石核



赤い丸で囲んだ部分
が剥片
（上からの撮影）



写真での角度の違い
右側が剥片
左側が石核



右側が剥片
左側が石核

写真2 実験1のルヴァロワ剥片と石核

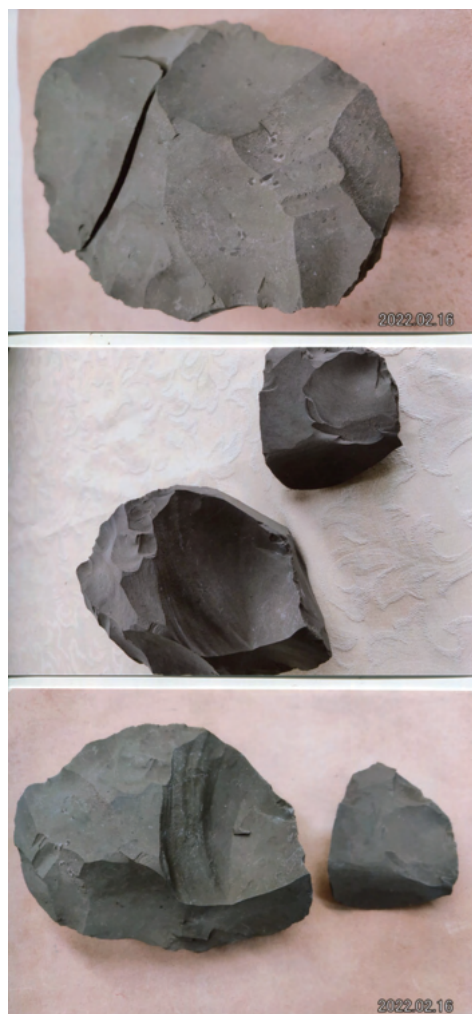
写真4 実験3のルヴァロワ剥片と石核



赤い丸で囲んだ部分
が剥片
(上からの撮影)

上が剥片
下が石核

写真5 実験4のルヴァロワ剥片と石核



石核の全体像

上が剥片
下が石核

右側が剥片
左側が石核

写真6 実験5のルヴァロワ剥片と石核

所が悪く力が広く伝わらなかったのが原因であろう。実験5では、石核が大きくて立派だったので、打点を決め力いっぱい敲石で叩いた。叩く場所が5mmぐらいずれてしまった結果、力が下方に働いて深くえぐれてしまった。

実験して気づいた点は、石核調整（特に上方の稜線）、正確な打点の位置、最終打撃の方向性はとても重要なポイントということである。どの作業にも、丁寧なことを、慎重にすることが必要である。最終打点への一撃には、打点に当てる敲石の位置と角度、敲石の大きさと重さ、力加減のコントロールが最も重要である。また、敲石の力を受取る石核の角度を保つことも重要である。

ルヴァロワ剥片の製作実験をしてみて、私の技量では、そんなに簡単に剥片を取ることは出来ないこと、もっと経験を積むことが必要であると感じづく痛感した。

まとめ

ネアンデルタール人が編み出した「ルヴァロワ技法」は、ハンドアックスが手に持って使うことを意図したデザインだったのに対して、石器を木の枝など他のものに装着して使用できるようになっている。

木の棒の先に石器（尖頭器）をつけた石槍を武器にケサイ、オオツノジカ、バイソン、ウマなどの大型動物を狩猟していたネアンデルタール人。これまでは、胴体が太く、腕や脚は短く、背は低くがっしりとした体型で言葉を持たず、知能の低い野蛮で粗野で愚鈍なイメージを持たれていたが、近年の研究により、ホモ・サピエンスに匹敵する大きな脳を持っていたことが分かってきた。野蛮で粗野なイメージから現代的行動（事前に計画する能力、複雑な社会的ネットワークの形成、技術革新、環境に適応する柔軟性、象徴性、儀式的営み）などの能力を獲得していたことを知った。ルヴァロワ技法の剥片を取るには、常に丁寧さと慎重な手順を必要としているこ

とを思うと、ネアンデルタール人の技術レベルの高さと緻密さを感じる。

ルヴァロワ技法製作実験は、私が思っていたような簡単な作業は一つもなかった。難しいが故に、厳しい自然環境で生き抜く人類の必死さを思い、石器づくりが生死にかかわる大事な道具づくりであると分かった。

石器づくりを通して、石器時代人の生きぬくための過酷な狩猟風景、埋葬する心と思いやりを持った埋葬儀礼風景、笛や貝の装飾品による精神的癒しを求めた風景など、ネアンデルタール人の生活を想像しながら学ぶことができたことを嬉しく思う。

おわりに

12月15日に縄文の森広場の佐藤祐輔先生に実際のルヴァロワ剥片が取れるまでの製作過程を見せていただきながら指導をいただいた。敲石の石核に当てる時の一撃を正確に出来たこと、打点の位置、当てる角度、力加減や速さのコントロールが出来た事で、大きめのルヴァロワ剥片が取れた。私にも上手く剥片が取れたと嬉しさでいっぱいになった。ご指導ありがとうございました。

また、週1回活動している石器班のメンバーの良きアドバイスと資料や応援をたくさんいただいた事に感謝申し上げます。未熟なレポートだが、ここまでたどり着くことが出来た。これからもさらに上達を目指して石器づくりの技術を磨きながら、今回の実験で得た気付きなどを生かして、館の体験に参加する子供たちにも石器づくりの面白さを伝えていきたいと考えている。

引用・参考文献

アリス・ロバーツ（2018）『人類の進化大図鑑』河出書房新社

NHK スペシャル「人類誕生」制作班（2018）『NHK スペシャル人類誕生』学研プラス

大沼克彦（2002）『文化としての石器づくり』学生社

旧石器文化談話会編（2000）『旧石器考古学辞典』学生社

小林達雄（2007）『考古学ハンドブック』新書館

竹岡俊樹（2011）『旧石器時代人の歴史』講談社

テルモ・ピエバニ・バレリー・ゼトウン（2021）『人類史マップ』日経ナショナルジオグラフィック社

仙台市の遺跡を訪問してみて

菅藤 俊昭

はじめに

今回私が市民文化財研究員に応募した理由は、仙台市の遺跡のことをもっと知りたいと思ったからである。

私は宮城県外出身者であり、仙台市の遺跡について詳しくなく、また遺跡に関する情報入手方法等も分らなかった。更に観光にやってきた友人たちを案内する場所が仙台城址等に限られてしまっており、他にもっと遺跡や文化財に触れられる場所を知りたいと思っていた。

活動する中で、いくつかの遺跡や博物館施設に足を運んだが、もっと現地に出かけ、自分の目で確かめ、体験し、臨場感を味わいたいと思うようになった。また、現地で得られたその感動をできれば家族や友人等にも伝えたいと思った。そのことにより、仙台市外、宮城県外の友人等の訪問が増加し、仙台市の観光の拡大に少しでも繋がれば嬉しいと考えたからである。

そこで、市民文化財研究員のレポートテーマとして、仙台市の遺跡がどのような場所にあるか、どういった状況なのか、できるだけ多く現地に足を運んで調べようと思った。

1. 遺跡訪問状況

今回、遺跡を訪問するにあたって、『仙台市史特別編 2 考古資料』（仙台市史編さん委員会 1995）を参考に、記載されている 198 遺跡を対象にした。

その中で貴重、重要な表記があるものを A とし（複数の時代に亘って記載されている遺跡は 1 と数えている。）、44 ケ所を選定した。また、活動する中で筆者が興味・関心を抱いた遺跡を B として 26 カ所を追加し、合計

70 カ所を訪問対象とした。

そのうち、レポートを執筆した 2 月 5 日までに訪問できた遺跡数は 59 遺跡である。

訪問した遺跡の概要は、別表（資料 A）にまとめた。

2. 知人・友人に紹介したいと思った遺跡

59 遺跡を巡った結果、心を動かされた遺跡は以下の 9 カ所であり、またその選定理由等は、次のとおりである。

（1）三神峯古墳群他（市史掲載遺跡番号 227 他、以下遺跡番号とする）

複数の年代の遺跡であることや敷地全体が公園化されており、四季折々の景色を楽しみながら安心して歴史を学べる場所と思う。

（2）沼遺跡（遺跡番号 242）

現地は小公園になっており、町内や地域住民に溶け込んでいるようで、一つの無名の遺跡の在り方のような気がする。他の多くの訪問した遺跡の周辺では、住民に遺跡の存在さえも忘れ去られていることを考えると非常に感銘を受けた。

（3）郡山遺跡（遺跡番号 316 他）

現地は広大な土地が整備中でロマンさえ感じる場所である。国指定の遺跡であるから、現地を訪ねた際に、発掘資料等を常時見学できる施設があると、理解がより深められるのではないかと思った。

（4）陸奥国分寺・尼寺（遺跡番号 533 他）

大変立派な受け入れ施設が整備され、安心して友人等を案内できる。また、近接地の買収なども進み規模の広大さを実感できるし、ボランティアの説明支援等も期待できる。

(5) 東光寺遺跡(遺跡番号 619)

時折通行してきた道路沿いに、これ程の磨崖仏、横穴古墳、古碑等が集積しているのは大変珍しかった。事前にパンフレット等を求めて再訪し理解を深めたい。

(6) 仙台北の丸跡(遺跡番号 702)・

三の丸跡(遺跡番号 703)

観光コースとしての本丸を複数回訪問した私は本丸には余り興味が湧かなくなっていた。そこで、二の丸・三の丸は余り足を向けない半面、知らない魅力が沢山残っているのではないと思う。もう少し建物配置や当時の情報を入手し、武家社会の生活を一緒に想像してみたい。

(7) 松森焰硝蔵跡(遺跡番号 722)

初めての訪問場所としては道順、途中の案内標柱、現場の土塁、説明板等が大変分かり易い施設であった。何故、青葉城から大変遠いこの場所に、重要施設が設置されたのか、今後自分でも確かめてみたいと思っている。

(8) 大年寺惣門(遺跡番号 713)と伊達家墓所

他県からの観光客等にとっては、案内が多くないことから知名度も低く、訪問した人は多くないと思う。従って瑞鳳殿の伊達家墓所を訪ねてもこの地を訪ねる人は少ない。しかし、伊達家霊廟等も見られ、一度訪ねたら多くの人は感動するに違いない。歴史好きな友人たちにも是非薦め、案内したいと考えている。

(9) 地下鉄富沢駅周辺の遺跡(遺跡番号 434 他)

「文化財パンフレット第 68 集 富沢駅周辺の遺跡」(仙台市教育委員会 2015)による文化財歴史散策が内容、範囲、時間等が程良い配分となっており、子供等とも楽しみながら巡れるコースである。また、パンフレットの作り方が訪問者本位であることを記し、敬意を表しておきたい。



参考 文化財パンフレット第 68 集

3. 課題と提案等

今回、いろいろな遺跡を訪問したが、その際感じた課題やお願いを以下に記すことにする。

課題 1 : 訪問先のパンフレット類の入手先が分からない初歩的な課題が自分にあった。これについては、仙台市教育委員会が窓口であり、仙台市図書館や市の各施設等に配布用が準備されていることが分り解決した。

課題 2 : 作成済みのパンフレットでも、その記載地図だけでは遺跡に到達できない場合があった。これについては、目的の遺跡までの案内道路(概略)を記載したパンフレットの作成をお願いしたい。モデルとしては「文化財パンフレット第 68 集 富沢駅周辺の遺跡」(仙台市教育委員会 2015)である。

課題 3 : 見学者に向けての案内看板類が不足している気がするので、遺跡までのポイントに案内標柱や説明板、更に数台分の駐車場の設置をお願いしたい。遺跡の重要度等を考慮しつつ計画的に増設をお願いしたい。

課題 4 : 近隣居住者にも、付近に遺跡があったことが理解されていないことが多くあったので、できるだけ仙台市の案内板や説明書きを設置し理解が広まるようにして頂きたい。

課題 5 : 一人で史跡を見学に行っても中々理解できない場合が多いので、国や県指定等の重要な遺跡は、ボランティア等の説明があると、その遺跡の理解が一層深まると考える。

おわりに

最後に、レポートを作成する中で出会った資料に書いてあった言葉を引用したい。

「埋蔵文化財は土地に密着して存在していることから、地域のシンボルとして、地域アイデンティティの確立や地域に対する誇りや愛着の醸成に欠くことのできない存在である。従ってこれらを保存し活用することにより、歴史を生かした個性ある地域づくりを進め、それを担う地域住民を育てる必要がある。」（近江 2019）との文言を見つけ非常に意を強くした次第である。

従って、もっと交通等の整備があるとより「歴史を生かした個性ある地域づくり」を進めることができ、地域住民だけでなく、市外、県外の観光客にも有効・有用なのではないだろうか。また、案内板や説明板等の表示や文化財パンフレット等が気付き易く手に取り易い場所にあることによって、市民がその文化財の情報に、よりアクセスし易くなるのではないかと強く感じた。

引用・参考文献

- 近江俊秀（2019）「Ⅰ 観光と考古学（1）埋蔵文化財の保存と観光的活用」『月刊考古学ジャーナル No.732 特集 観光考古学』ニューサイエンス社
- 小松弥生（2021）『文化遺産の保存と活用 仕組と実際』株式会社クバプロ
- 仙台市史編さん委員会編（1995）『仙台市史 特別編2 考古資料』仙台市
- 仙台市教育委員会（2015）『文化財パンフレット第68集 富沢駅周辺の遺跡』仙台市教育委員会

資料A 遺跡訪問状況表

凡例 A：仙台市史の重要度表現あり B：筆者の興味

通し番号	区分	掲載遺跡番号	遺跡名称	訪問月日	状況・コメント	駐車場	説明書	案内板	指定区分	改善希望	備考
1	A	101	青葉山遺跡	9.28	訪問すれど、東北大学の建物が連立し不明。手掛かりを求めて数回自然史標本館を訪ねるもコロナ等で臨時休館日であった。	有	無	無		案内板	
2	A	102,225	山田上ノ台遺跡	6.30、10.13	研修で2回訪問し、その後数回自身でも訪問。立派に整備された屋内外で多くのエリアの説明をして頂いた。土器の破片の洗浄作業の体験では、大変なご苦勞をされていることを実感。	有	有	有		特に無し	
3	A	224	北前遺跡	12.23	縄文の森広場の方から場所を教えてください、太白消防署の玄関前の説明書と竪穴住居の炉を写真に収め確認とした。	有	有	無		案内板。説明板	
4	A	105	上ノ原山遺跡	9.13	人來田団地に行き、入る場所を探すも不明。案内看板見つけられず。	不明	不明	不明		案内板。説明板	
5	A	106,228	富沢遺跡	5.26 他	遺跡面をそのままの状態に保存し公開していることや屋外の植生復元にも注力し旧石器時代の環境を私たちに伝えようとしていることに感動する。立派な施設なので、他県の観光客等にもっと来訪してもらいたいと思う。	有	有	有		特に無し	
6	A	201	野川遺跡	9.7、9.27	午前中訪問するも看板類見つけられず。別に熊ヶ根城の標柱を発見。バス停、大手門前。午後、再訪し付近に住む住民に尋ねるも分からないとのこと。	無	無	無		案内板。説明板	
7	A	202	蒲沢山遺跡	9.13	赤坂団地を訪ねるも、それらしい場所等は不明。公園で子供と遊んでいた母親二人に聞いても知らないとのこと。	不明	不明	不明		案内板。説明板	
8	A	221	茂庭けんとう城跡	9.13	茂庭浄水場を目指し、南側と高速道路側から近付いたが、ガス工事等もあり進めず断念した。	不明	不明	不明		案内板。説明板	
9	A	222	人來田遺跡	9.13	案内看板等は見つけられず。居住者の主婦に聞いても全く不明。	不明	不明	不明		案内板。説明板	
10	A	223	御堂平遺跡	12.23	校門付近で、道路清掃中の生徒及び先生に尋ねてみたが分からないとのこと。	不明	不明	不明		案内板。説明板	
11	A	227	三神峯遺跡	9.9	1時間程かけて歩き廻ったが、それらしい場所を探せなかった。	有	無	無		案内板。説明板	
12	A	236,316	郡山遺跡	11.14	点在しているが、広大な土地が整備中であつた。設置されている説明板からだけではなかなか理解が難しかった。発掘した出土品の展示館等があればより理解が深まると思った。	無	有	不明	国指定	案内板 駐車場	写真1
13	A	239,305	高田B遺跡	9.12	草刈り中のゴルフ練習場の方に聞くも詳細不明。想定される土地に行き通行中の主婦（近隣居住者）に聞いても分からず。	不明	不明	不明		案内板。説明板	
14	A	302	中在家南遺跡	9.19	新興住宅地になっており、仙台市史の地図とは全く違う地形で分からない。	不明	不明	不明		案内板。説明板	
15	A	313,402	安久東遺跡	12.23	中田神社の宮司様から具体的場所を伺った。安久公園内に説明板があつた。公園内の説明書きと古墳を確認した。立派なわけではないが、地域に同化して大切にされていると感じた。	不明	有	無		案内板	写真2

通し番号	区分	掲載遺跡番号	遺跡名称	訪問月日	状況・コメント	駐車場	説明書	案内板	指定区分	改善希望	備考
16	A	403	遠見塚古墳	9.4	入口が分からず、又駐車場がなく近づくのに苦労した。午前中雨の為、通路に水があり、頂きに行けなかった。国指定文化財としては残念である。	無	有	有	国指定	駐車場	写真— 3
17	A	404	裏町古墳	9.19	国道286号線と旧秋保街道側から訪ねるも、探せず。地元に住むコンビニの店員に聞いても知らないとのこと。再訪か？	無	無	無		説明書き	
18	A	405	兜塚古墳	9.19	立派に管理されている。中に入って見学したいがフェンスで周囲が囲われ中に入れない。石碑あり。宮城県総合運動場の側に案内表示のポール有り。	無	有	有		駐車場	写真— 4
19	A	432	燕沢遺跡	1.29	燕沢小学校付近で犬と散歩中の住人に聞いたが、遺跡の事は聞いたことがないとのこと。	不明	不明	不明		案内板。説明板	
20	A	434	六反田遺跡	11.29	文化財歴史散策MAP（第 68 集）により、隣接関連する遺跡の14ポイントの説明板と2ヶ所の総合案内板に基づき現地を散策した。大変分かり易く、各遺跡の関連等が理解できたように思う。	不明	有	有		特に無し	
21	A	435	下ノ内遺跡	11.29	文化財歴史散策MAP（第 68 集）により、隣接関連する遺跡の14ポイントの説明板と2ヶ所の総合案内板に基づき現地を散策した。大変分かり易く、各遺跡の関連等が理解できたように思う。	不明	有	有		特に無し	写真— 5
22	A	436	伊古田遺跡	11.29	文化財歴史散策MAP（第 68 集）により、隣接関連する遺跡の14ポイントの説明板と2ヶ所の総合案内板に基づき現地を散策した。大変分かり易く、各遺跡の関連等が理解できたように思う。	不明	有	有		特に無し	
23	A	439	藤田新田遺跡	1.29	田畑の中で想定する住所付近を捜したが見つけれなかった。人通りもなく聞くこともできなかった。	不明	不明	不明			
24	A	443	戸ノ内遺跡	1.29	戸ノ内地内の居住者で畑仕事中の奥様に尋ねたら、この一帯が遺跡である。宅地造成前に遺跡調査も実施している。只、案内板や説明板等は設置されてないとのこと。	無	無	無		案内板。説明板	
25	A	446	栗遺跡	1.29	西中田公園で遊んでいた同じ町内に住む女子中学生二人に聞いたが、遺跡に関する看板類を見たことがないとのことと場所等を特定できなかった。	無	無	無		案内板。説明板	
26	A	448	大蓮寺窯跡	1.29	大蓮寺の下の道路に車を止め、高台の寺内付近を捜したが、窯跡らしいものは見つけれなかった。	不明	不明	不明		案内板。説明板	
27	A	509	中田南遺跡	11.14	近くまで行き、付近に住む人に尋ねたが分からないとのことと手掛かりを確認できなかった	不明	不明	不明		案内板。説明板	
28	A	510	中田畑中遺跡	1.29	探しても見つけれられず。又カーナビ、スマホでもヒットせず断念した。	不明	不明	不明		案内板。説明板	
29	A	516,315	赤生津遺跡	9.2、 1.25	訪問するも見つけれられず。一再訪予定。七北田公園都市緑化ホールの事務所にて話を聞いた。公園の造成時に遺跡の調査をしたが、案内看板等は現在設置されていないとのこと。	無	無	無		案内板。説明板	
30	A	619	東光寺遺跡	9.11	一時間程かけてゆっくり見学した。磨崖仏、古碑、横穴古墳など珍しかった。配置図や説明書き等があれば再訪し確認したい。	有	有	有		案内板。説明板	写真— 6
31	A	702	仙台城跡 (二の丸跡)		入口付近に敷地内の案内看板はあるが汚れて不鮮明。敷地が広大でどこに何があったのか等の説明があれば再訪し確認したい。2月2日に再訪したら付近の説明板が刷新されていて安堵した。	不明	有	有	国指定	定期点検	写真— 7

通し番号	区分	掲載遺跡番号	遺跡名称	訪問月日	状況・コメント	駐車場	説明書	案内板	指定区分	改善希望	備考
32	A	703	仙台北城跡 (三の丸跡)	9.28	子の門、巽門を見学すべく進むと、教育委員会で発掘調査中。担当の須貝さんに現地の説明をして頂いた。興味が増しました。	有	有	有	国指定	特に無し	
33	A	704	西館跡	10.23	国道沿いに案内板があり、付近までは近付けたが具体的な場所が分からず、吉岡屋の方やGSスタンドの店員に聞き判明。	不明	有	有	市指定	案内板	
34	B	414	法領塚古墳	9.4、 10.29	二回目に学校内に案内していただき、入口、周囲、墳頂部等を見学させて頂いた。又、伊達伯爵邸の事や養種園との関わりなどを教えていただいた。	有	有	無		特に無し	
35	B	522	五本松窯跡	9.24	その前に立つと小山の状態で全面に松が植わっている。公園入り口付近に案内板がないので、近づかないと存在が分からない。前に立つと理解できた。	有	有	有		入口付近の案内板	写真－8
36	B	709	養種園遺跡	10.04	養種園、別荘の跡地看板があるのみで、特に残っているものは見つけられなかった。	有	有	不明		特に無し	
37	B	714	経ヶ峯伊達家墓所	10.03	2～3代墓所を中心に見学。2021年2月の地震で石灯籠が転倒・散乱。建物他立派であった。	有	有	有	市指定	特に無し	
38	B	722	松森焰硝蔵跡	9.24	行く途中、方向指示の案内看板あり親切。敷地内に説明看板あり。見学者には見本のような場所だった。	有	有	有		立派	写真－9
39	B	242	沼遺跡	9.2	現地は公園になっていた。石碑あり。入口にコンクリート製の土偶の形をしたの車止あり。町内や子供たちにも溶け込んでいるようで、一つの遺跡の在り方のような気がした。	無	有	不明		特に無し	写真－10
40	B	244	高柳遺跡	9.2	雑草地になっている場所が、その場所と思われた。	無	無	無		案内板。説明板	
41	B	409	三神峯古墳群	9.9	公園内を探すもなかなか見つけられなかったが、帰途に偶然、古墳と思われる二つの小山を発見した。	有	無	無		案内板。説明板	
42	B	416	台屋敷・入生沢横穴墓群	9.11	進入路不明で見学できず。近くに住む人とも会えず、聞くこともできなかった。機会があれば再訪したい。	不明	不明	不明		案内板。説明板	
43	B	419	向山横穴墓群	9.16、 9.17	①大年寺山→ますみ幼稚園の山側を探すも見つけられず。 ②国交省愛宕橋宿舎の奥で3カ所の穴を発見その後は夏草が生い茂り探すのは困難であった。	有	無	無		案内板。説明板	写真－11
44	B	419	向山横穴墓群	9.16、 9.17	③墓参の檀家のご夫妻に出会い、夫の小さい頃は本堂の北側にあったが、本堂改修時に覆ってしまったとのこと。(宗禅寺) ④茂ヶ崎を訪ねたが全く辿り着けず。	無	無	無		案内板。説明板	
45	B	424	城丸古墳	9.12	戸ノ内遺跡を目指し運転中に偶然見つけた。仙台市教育委員会の標柱あり。	無	有	無		特に無し	
46	B	521	台原・小田原窯跡群	9.02、 9.24	①堤人形店のご主人より。店から500M位西に入った所に、昔は残骸があったが宅地になった。(堤町) ②五城中北：北側を東照宮方面に歩くが探せず。知人の住人に聞くも不明。	不明	不明	不明		案内板。説明板	
47	B	533	陸奥国分寺跡	9.7、 11.10	①休館日であった。 ②ボランティアの方に、敷地の大部分を説明・案内してもらい漸く概略を飲み込めた気がする。大変立派な施設になりつつあるので、何回か訪れ理解を深めたい。	有	有	有	国指定	特に無し	

通し番号	区分	掲載遺跡番号	遺跡名称	訪問月日	状況・コメント	駐車場	説明書	案内板	指定区分	改善希望	備考
48	B	534	陸奥国分尼寺跡	9.07	北側～東側～南側と廻ったが、現在は曹洞宗のお寺があり、寺内に入って見学は辛い。お寺が掲示している由来書きから概略を知った。	無	有	有	国指定	特に無し	
49	B	607	洞ノ口遺跡	9.11	場所特定できず。聞き取りもできなかった。再訪したい。	不明	不明	不明		案内板。説明板	
50	B	608	岩切城跡	9.11	十数年振りに再訪。帰り道に仙台平野が一望でき、素晴らしい立地条件を再認識した。	有	有	有	国指定	特に無し	
51	B	610	長命館跡	9.11	桜の木の広場まで登ったが進行方向が分かりづらい。近隣の方々の散歩コースになっている様子である。時間をかけて再訪しないと分からない。	無	有	有		駐車場	
52	B	617	今泉遺跡	9.11	岩切の方に場所を訪ねたが不明。代々住んでいる方ではないのかも？	不明	不明	不明		案内板。説明板	
53	B	713	大年寺惣門	10.04	大変立派であった。説明看板あり。	無	有	不明	市指定	特に無し	
54	B	718	新妻家墓地	10.18	自宅から徒歩10分程の場所で時折散歩する道に妙見神社とう社がある。場所、名前から其れであろうと思われる。出土品を見学してみたいものである。	無	無	無		特に無し	
55	B	720	杉土手	12.23	山田市民センターの敷地内、一部見学用にに残っている。大変分かり易かった。	有	有	有		特に無し	写真12
56	B	701	北目城跡	11.14	案内標柱を見つけたが、交通量が多く駐車できる場所がなかった。位置を確認できたので徒歩での訪問を再検討。	不明	不明	有		特に無し	
57	B	234,408	大野田遺跡	11.29	文化財歴史散策MAP（第68集）により、隣接関連する遺跡の14ポイントの説明板と2ヶ所の総合案内板に基づき現地を散策した。大変分かり易く、各遺跡の関連等が理解できたように思う。	不明	有	有		特に無し	
58	B	408	春日社古墳	11.29	文化財歴史散策MAP（第68集）により、隣接関連する遺跡の14ポイントの説明板と2ヶ所の総合案内板に基づき現地を散策した。大変分かり易く、各遺跡の関連等が理解できたように思う。	不明	有	有		特に無し	
59	B	235	王ノ壇遺跡他	11.29	文化財歴史散策MAP（第68集）により、隣接関連する遺跡の14ポイントの説明板と2ヶ所の総合案内板に基づき現地を散策した。大変分かり易く、各遺跡の関連等が理解できたように思う。	不明	有	有		特に無し	



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7



写真8



写真9



写真10



写真11



写真12

縄文時代のアクセサリー

鈴木 清美

はじめに

博物館や本で、発掘された縄文時代のアクセサリーを見た時に、牙や貝殻で作られているものや、かわいいヘアピン、美しい文様の耳飾りがあった。縄文人は、どんな時に、何のためにこれらのアクセサリーを身に着けていたのか興味を持ったので、縄文時代のアクセサリーについて調べてみた。

1. 耳飾り

縄文時代の耳飾りには玦状耳飾り(写真1)と栓状耳飾り(写真2)がある。

玦状耳飾りは、平たく丸い形のものに一ヶ所だけ切れ目が入った耳飾りで、石製、土製、骨角製があり、縄文時代前期から作られる。



写真1 色々の素材でできた玦状耳飾り

左上：石製・大阪府国府遺跡出土、右上：石製・神奈川県上浜田遺跡出土、左下：土製・東京都多摩ニュータウン遺跡出土、右下：鹿角製・岡山県中津貝塚出土

(春成 1997 より引用)

栓状耳飾りは、耳たぶに開けた穴に全体をはめ込む耳飾りで、土製、木製、骨角製、石製がある。中でも、もっとも多いのは、粘土

で作って焼いて仕上げた土製栓状耳飾りである。



写真2 土製栓状耳飾り

上：青森県是川遺跡出土、

下：群馬県千網谷戸遺跡出土

(春成 1997 より引用)

土製栓状耳飾りの分布の中心は東日本で、縄文時代晩期に作られた耳飾りが、長野県エリ穴遺跡、新潟県籠峰遺跡、群馬県茅野遺跡、群馬県千網谷戸遺跡などで大量に見ついている。特に、千網谷戸遺跡からは、大型の美しい透かし文様の耳飾りが出土している。一番大きな耳飾りの直径は約9cmで、耳たぶに直接あたる部分の直径は7.7cmである。

この耳飾りを写真で見た時、美しい模様にも驚いたが、これを耳たぶにはめ込んでいた事にも驚いた。

群馬県茅野遺跡や群馬県千網谷戸遺跡などからは、直径約1cmの小さな耳飾りから直径約8cmのものまで、さまざまな大きさの耳飾りが出土している(写真3)。はじめは耳たぶに小さな穴を開けて小さなものをはめ込み、成長とともに次第に大きなものに替えて

いったと考えられている。

写真4のように大きな耳飾りは、見た目の直径を大きくして、装着部直径は小さくしていたようだ。裏面を抉り中央に穴を開けたり、透かし模様を入れることで軽くする事ができることから、春成秀爾氏や土肥孝氏は、耳飾りを作製するための優れた技術を持った人が、千網谷戸遺跡の周辺に住んでいたと考えている（春成 1997・土肥 2011）。



写真3 さまざまな大きさの耳飾り
（群馬県茅野遺跡出土、春成 1997 より引用）



写真4 群馬県千網谷戸遺跡出土の耳飾り
（春成 1997 より引用）

2. ネックレス

縄文時代には素材に穴を開けて、ヒモで繋いでビーズのようにしたネックレスが見つかる。

素材として多く使用されているのは、イモガイやタカラガイなどの貝類やオオカミやクマ、イノシシなどの動物の骨や歯、石、土などである。

蛇紋岩でつくった首飾りが鹿児島県上加世田遺跡から、両端に抉りをいれた蛇紋岩の珠が福岡県山鹿貝塚から見つかっている。ヒスイの大珠が青森県三内丸山遺跡や富山県朝日遺跡から見つかっている。富山県北代遺跡からは、ヒスイ製の大型の勾玉、小玉が見つかっている。

ヒスイは、新潟県糸魚川市の姫川上流や、その支流に原産地があり、海岸に打ち上げられた転石を原料にして制作され、東日本を中心に分布しているヒスイの玉類のほとんどが糸魚川産である（池谷 2020）。

ヒスイは希少性があり、また、たいへん硬く加工もしにくく耐久性に優れている。このことから、ヒスイで作られたアクセサリーは、集団のリーダーなど限られた人物が身に付けていたと考えられる。



写真5 新潟県糸魚川産のヒスイでつくられた勾玉
（北海道大川遺跡出土、池谷 2020 より引用）

3. その他のアクセサリー

その他にも、縄文時代にはたくさんのアクセサリーが作られていたようである。そのうちのいくつかを紹介する。

・髪飾り

木製の櫛や角製のヘアピンが各地から出土している。人形（顔が描かれた）の骨製ヘアピンが宮城県沼津貝塚から、赤漆塗りの木の櫛が埼玉県後谷遺跡などから出土している。髪をまとめて結って、そこにヘアピンや櫛を挿していたと考えられる。

・腕輪

二枚貝の腕輪が岡山県中津貝塚から、猪の牙で作った腕輪が宮城県南境貝塚などから見つかっている。

・腰飾り

鹿角製の腰飾りが、宮城県屋敷浜貝塚や宮城県里浜貝塚などから見つかっている。



写真6 宮城県里浜貝塚出土の腰飾り
(東北歴史博物館常設展示、筆者撮影)

まとめ

福岡県山鹿貝塚から、サメの歯の耳飾り2個、蛇紋岩の大珠1個、貝の腕輪19個をつけて埋葬された女性が見つかっている。縄文時代の遺跡から見つかる墓からは、アクセサリと一緒に見つからない場合が多い。山鹿貝塚の例では、骨と一緒にアクセサリがたくさん見つかることから、女性の呪術師なのではないかと考えられている。

春成氏は、「腰飾りは祖先の霊や土地と自分を強く結びつける血縁の象徴と、近づいてくる邪悪なものを寄せ付けない呪具である」と述べている（春成1985）。また、クマやオオカミなど動物の牙のネックレスは、「熊や狼などの獣の鋭い牙でわが身を護りたい、大

事なものを身体に紐で結んでおきたいという願いがあったのでしょうか」と述べている（春成1997）。動物の持っている神秘性や強さを利用するという考えに納得できるため、私も、縄文時代のアクセサリは、呪術や魔除け、自分を強く見せるお守りとして使われていたと考えたい。

現代では、テレビのスポーツ中継、特に個人競技のマラソンやスケートの選手がスタート前、首にネックレスをし、胸に手を当てている姿を目にする。平常心で戦えるように、強い気持ちで戦えるように、お守りとしてのネックレスなのだろうか。大切な人からもらったものなのかもしれない。

私も誕生石や守護石（パワーストーン）など、気に入った石を身に着けると全身に力が入り、強い気持ちになれる。

現代の私たちがアクセサリを身に着ける時に感じるそうした感情を、縄文時代の人々ももっていたのだろうか。

おわりに

今回、このテーマでレポートを書くため、図書館で本を探したり、仙台市博物館や東北歴史博物館にも行った。コロナ禍ということで県外の施設にはなかなか足を運べなかったが、コロナ禍があけたら、写真を見て、本物を見てみたいと思ったアクセサリを見に、ちょっと遠くまで出かけてみたい。今回、市民文化財研究員として活動するなかで、たくさんの知識を得ることができた。遺物を見る時、より興味深く見られるようになりました。ありがとうございました。

引用・参考文献

- 池谷和信（2020）『ビーズでたどるホモ・サピエンス 美の起源に迫る』昭和堂
- 岡村道雄（2000）『全国訪ねてみたい古代遺跡 100』成美堂出版
- 瓦吹堅（2000）「縄文時代の装身具 埋葬と装身具」『月刊考古学ジャーナル No. 466』ニューサイエンス社
- 玉元陽子（2019）「碧の石の民俗 古代人に好まれた碧の石たち」『ミネラ No. 58』エスプレスメディア出版
- 土肥孝（2011）「縄文文化論最終回 千網谷戸型耳飾りについて」『月刊考古学ジャーナル No. 613』ニューサイエンス社
- 春成秀爾（1985）「鉤と霊—有鉤短剣の研究—」『国立歴史民俗博物館研究報告 第7集』国立歴史民俗博物館
- 春成秀爾編（1997）『歴史発掘4 古代の装い』講談社
- 吹野富美夫（2000）「縄文時代の装身具 土製装身具と埋葬」『月刊考古学ジャーナル No. 466』ニューサイエンス社
- 増田美子（2013）『日本服飾史』東京堂出版
- 吉田泰幸（2003）「縄文時代における土製栓状耳飾りの研究」『名古屋大学博物館報告No. 19』名古屋大学

市民文化財研究員活動報告書 26

発行日 令和4年（2022）年3月31日
発 行 仙台市教育委員会
編 集 公益財団法人 仙台市市民文化事業団
仙台市富沢遺跡保存館（地底の森ミュージアム）
〒982-0012 仙台市太白区長町南4-3-1
TEL 022-246-9153